

ain



Atelier Laboratory / Fern

空間の温度感を高める工夫

心地よさを簡単に表すことはできませんが、確かに空間に漂う雰囲気や空気感。空間の温度感とも取れる質感や密度はどのような視点で捉えれば良いのでしょうか。インテリアスタイリスト黒田美津子さんが今年2月に作られた北軽井沢のアトリエを訪ね空間事例を元にそのヒントを伺いました。



時間を受継ぐものと 環境から受けるバランス

インテリアスタイリストという職業柄、黒田さんはこれまで雑誌撮影やショールーム展示などインテリアに纏わる数多くのプロジェクトを手がけてきた。アトリエをつくらうという想いは30年以上のキャリアの中で自然と温めてきた想いだった。

元の建物は昭和36年に建てられた古い別荘。リノベーションか新築か迷ったが知人の後押しに加え、解体時に現れた梁が建築家ジョン・ボーンソンの自邸を彷彿とさせイメージが見え始める。リノベーションでは既視感のある誰かのスタイルではなく、自分らしい空間にしようと心に決めた。「仕事では何らかの制約や条件に合わせてスタイリングをすることが多く、必ずしも自由気ままにできるわけではないですね。それだけに、自分が今本当に欲しい空間がどうなるのか、実際にやってみるまでわからなくなって。間取りや素材を吟味するうちに初めてこれが私が好きな要素だったんだと気づきました」

ベースとなる壁や造作家具の面材の色として選んだ薄いグレーは何百色とある選択肢から設計者と共に繰り返し検討を重ねた。古い建物に白を選ぶとカントリー調のように空間が甘くなってしまう。かといってグレー一色すると生活感に欠け山の風景には合わない。あえて温度感があまりない色を選んだ。その分合わせる家具は経年変化の味わいが感じられる木製のものを取り入れた。木の材質はオークという焦点は定めつつミース・ファン・



デル・ローエの藤の椅子など、モダンなピースを混ぜて木製だけに偏らないバランスにしている。手持ちの家具や小物を組み合わせ自然と室内が纏まるように設えることができるのは、やはりスタイリスト本来の感性と訓練の賜物なのだろう。「たとえば曾祖父の時代から受け継いだ物、ここ10年間に買った物、購入したのはごく最近だがヴィンテージ、アノニマスの物などが混在しています」選ばれる物もさながら、ゆったりとしたレイアウトバランスには物に対する敬意が一層感じられる。中にはここで拾ったリスが食べた跡が残る松ぼっくりや野花も添えられている。この場所が山小屋であり、山の中で暮らすという環境の要素はプロダクトを選ぶ視点やスタイリングに大きく影響している。

「ダイニングの照明はサンタンドコールのフォークロアな雰囲気、山ならではの味わいのものに。ここが海だったらまた全く違う景色になったでしょうね」

花を摘みにいく 水を汲みにいく 鳥に餌をあげる

実際の暮らし方を尋ねると、環境に受け込んだ回答が返ってきた。「花を摘む」と言葉にする中街中でもできそうな行為だが、現代の暮らしからはどこか遠のいてしまった感覚に陥る。黒田さんが大切にしていることはどれも素直に共感できるシンプルさがある。知らない植物を知ったり、鳥の名前がだん

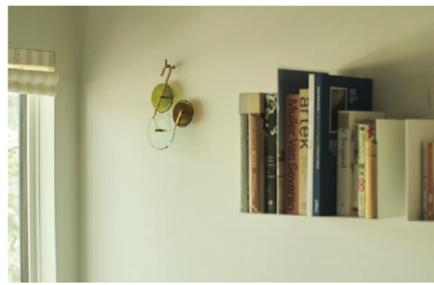


だんわかるようになるなど、日々新しい発見の連続だ。

「この家で初めて薪ストーブを取り入れたんです。上手に点火できて火を焚べられる、この歳になって新しいことができるようになるって楽しいですよ」

さりとて、それは隠居するというイメージとは程遠いようだ。「このアトリエはインテリアの実験の場なんです。50、60代の楽しい老後を過ごす世代や、若い人でも将来こんな老後が過ごせたいことを発信する場として活用したいと思っています」

新たなクリエイションを体現しながら伝えていく姿勢には黒田さんの人柄や生き方が滲む。庭に凍と生えるたらの芽を踏まないよう気をつけながら進む黒田さんを追って歩く時間は、そのしなやかな意志の片鱗を感じられるひとときだった。



廊下に飾られたコンスタンティン・グルテッチのタイルは自身でフレームに制作した。森から拾ってきた藁が背景に美しい影をつくる。



Laboratory / Fern
アトリエ

Laboratory / Barn
キュレーションスペース

Laboratory / Pine garden South North
ガーデン



黒田 美津子

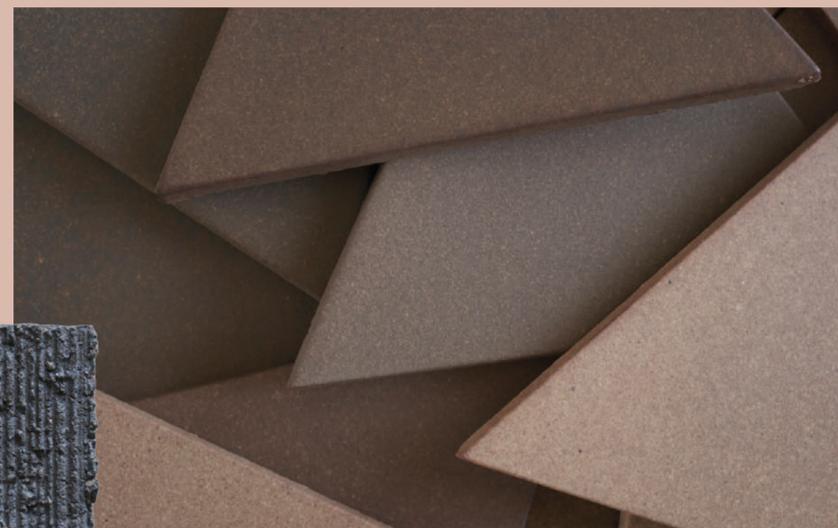
Laboratory Inc.インテリアスタイリスト、スタイルディレクター。『Hanako』誌(マガジンハウス)1988年創刊時より編集に参加。以後、多数の女性誌、デザイン誌でデザイン・インテリア関連記事の編集、執筆、スタイリングを担当。現在は雑誌のほか、広告美術、住宅や展示会、商業施設、店舗、美術館の空間構成やスタイリングやVMDから個人部まで、さまざまな空間のインテリアと空間演出を手掛けている。『&Premium』誌(マガジンハウス刊)にて『&Lifelong Items』から、20年使いたい日用品』連載中。2024年、群馬県北軽井沢にアトリエLaboratory / Fern、キュレーションスペースLaboratory / Barnを開設。

instagram
@mitsulab @laboratory_fern_barn

還元焼成

うつわやタイルなど陶磁器が焼かれるときの目に見えない部分をちょっと想像してみよう。生地となる土に造形を加え、窯に入れて焼く。窯の中の空気中には炎と共に酸素が流れている。一般的に陶磁器を自然に焼くと、焼き上がるまで酸素に触れた状態になる。では窯の中の酸素を抜いてみたらどうなるだろう。窯の中の酸素を制限すると土に含まれる金属成分が酸素を取りに行こうと変色をする。生地の中に鉄を入れておくと茶色くなったり、マンガンだとシルバーなど金属の光沢が出る。それらの成分箇所だけがほんやりと濃淡をつける。これが還元焼成という焼き方だ。

この焼き方の特徴はコントロールしているようでコントロールできないところにある。同じ条件の土を入れても熱量と酸素の入り方が色の出方を左右する。例えば同じ窯で温度が1000度で500kgのものを焼く場合と1000kgのものを焼く場合では熱量が変わる。炎のあたり方に加えわずかに日本の湿度や気温も関連し試作をするたびに色が変わるのだ。従事する方々はよく「炎の神さまに聞いてみないとわからない」という言葉を口にする。炎、酸素、焼成時間、重量を管理したデータに基づき現在も試作が繰り返されている。同品質でものを生み出す工業製品と異なり、炎が生み出す真の焼きものらしい魅力がタイル1枚ごとの小宇宙にも表現されている。



貼り巡る本

焼きものと空間、建築にまつわるエッセンスのある書籍をご紹介します。
どうぞ良い読書の時間を。

「リーチ先生」

イギリス人陶芸家バーナード・リーチとその助手の絆が描かれた物語。生まれも環境も異なる2人と民藝運動に関わった登場人物が史実への想像を掻き立て、ストーリーをより奥深くしている。物語を通し焼きもの世界、陶芸家について背景からより深く知ることができる。/原田マハ著 集英社

「空気感(アトモスフェア)」

優れた質の良い建築、人間の情緒的な感覚に訴える空間とは何かを建築家ペーター・ツトムアが説く講演録。建築と環境、木や石などの素材が組み合わさることによって生まれる素材相互が共鳴する美しさなど、素材の無限の可能性についても触れられている。/ペーター・ツトムア著 鈴木仁子訳 みすず書房

「酒井一光論考集 建築学芸員のまなざし」

大阪歴史博物館の学芸員であり近代大阪建築の研究者であった故酒井一光氏が綴った遺稿集。建築物をハードな側面からだけでなくインタビューや会話などの丁寧な寄稿から近代建築や在り様や建築家の意志など垣間見ることができ、とりわけ煉瓦やタイルへの造詣は深く、目地の入れ方に至るまでやわらかな考察が魅力的だ。/酒井一光著 酒井一光遺稿集刊行委員会編集 青幻舎

「建築を気持ちで考える」

知識や概念ではなく空間に身を委ねたときの気持ちから建築を考える。その手法がいかに多角的な視野と考察から設計に携わられているかを感じられる一冊。またその姿勢に触れることで自身が建築家かどうかに関わらず自然と素直な気持ちにさせてくれる。/堀部安嗣著 TOTO出版

「世界のタイル 日本のタイル」

タイルの原点から歴史を紐解き幅広い視野で現代のタイル文化へ繋がる一途を辿る一冊。世界のあらゆる文化の潮流からタイルが建材という枠を越え、工芸品や装飾品として扱われてきたことがビジュアルと共に包括的に理解できる。/INAXライブミュージアム編 LIXIL出版



「姿勢としてのデザイン 『デザイン』が変革の主体となるとき」

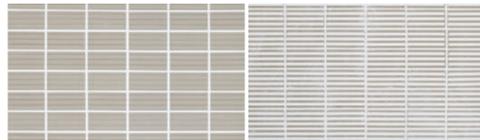
デザインという言葉が広く普及し、商業的に大きく影響する現代だからこそデザインの本来の役割とは。新世代のデザイナーたちが環境危機、政治、人種など社会の問題にデザインを通じ自主的に取り組む姿勢が紹介されている。より良い未来に向けた課題に寄り添いながらデザインが果たすべき方向性を探求できる。/アリス・ローソン著 石原薫訳 フィルムアート社



ウラタイル

ウラから取り組むアップサイクル

一般的にタイルの裏側を目にする人はきつと数少ない。しかし裏にも魅力があることを教えてくれるのがこの「ウラタイル」というプロジェクトだ。なぜ裏なのか。きっかけはタイル工場の産業廃棄物を減らす取り組みから生まれた。タイル工場では未利用や不良タイルといった世に出ないまま廃棄されるタイルが一定数存在する。それを回収しアップサイクルすることで日々の廃棄量を減らしモノづくりにおける課題解決を目指している。そう言いつつ素焼きの土本来の美しさと裏とと言われる凹凸の表情を活かした目地の加工や陰影の表情、金型による刻印などは裏ならではの楽しみかもしれない。タイルの裏側から眺める景色が空間と産業に新たな息吹をもたらす。



問い合わせ先 有限会社 studio point
http://uratile.com



平田タイル ショールーム

東京 東京都中野区本町1-32-2 ハーモニクスエア1F
Tel 03-5308-1135

名古屋 愛知県名古屋市中区錦2-20-8 東栄ビル2F
Tel 052-218-3186

大阪 大阪府大阪市西区阿波座1-1-10 1・2・3F
Tel 06-6532-2002

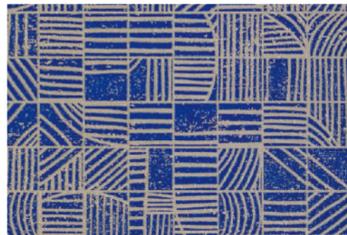
福岡 福岡県福岡市博多区店屋町1-35
博多三井ビルディング2号館1F
Tel 092-263-5075

営業時間 10:00-17:00 水曜・日曜・祝日定休

営業時間は予告なく変更となる場合がございます。各ショールームへの電話及びホームページよりご確認ください。

tiles オンラインコンサルティングも承っております
https://tiles.hiratatile.co.jp/

今号の表紙タイル Mater



デザインのインスピレーション源となったのは1950年代後半のグラフィック、特に南イタリアに伝わるイラストが印象的なVietri陶器の職人技術から。地球の色を思わせる色彩と厚みのある釉薬がデザインをさらに引き立てる。パトリシア・ウルキオラによるデザイン。

ain staff
creative director / Editor
Fumukawa Mayuko
Art director / Designer
So Sachi
Photographer
Morito Yuki
Illustrator
Wakuda Chiharu

aiu (あいう) は母音が名前の由来になっている、タイルと焼きものにまつわる背景を紹介する情報ツールです。

[aiu] 発行年月日: 2024年6月5日 第6号発行
制作: aiu編集部 発行元: 株式会社 タイル
大阪府西区阿波座1-1-10 06-6532-1284

